

4. まとめ

4.1 空間 γ 線線量率

対応基準値（200nGy/h）を超えた結果はなかった。

空間 γ 線線量率について、平成19年1月から12月の調査期間における平均値、最大値、最小値等を算出するとともに、その変動範囲及び変動要因について解析を行った。空間 γ 線線量率の変動範囲は、過去3年間の変動範囲とほぼ同程度であったが、6測定所において過去の最大値を超える値が認められた。これらについては、降雨や降雪等の自然現象による影響であると考えられ、人工放射性核種の影響は認められなかった。

4.2 大気浮遊じんの全 α ・全 β 放射能濃度

6時間測定値について、対応基準値（通常的全 β /全 α 放射能濃度比の1.5倍）を超えた結果はなかった。

大気浮遊じんの全 α ・全 β 放射能濃度及び全 β /全 α 放射能濃度比についての平成19年1月から12月の調査期間における平均値、最大値、最小値等を算出するとともに、その変動範囲及び変動要因について解析を行った。大気浮遊じんの全 α ・全 β 放射能濃度の変動範囲は、過去3年間の変動範囲とほぼ同程度であったが、6測定所において過去の最大値を超える値が認められた。これらについては、全 β /全 α 放射能濃度比に異常は見られなかったことから、自然現象によるものと考えられ、人工放射性核種の影響は認められなかった。なお、平成19年12月に越前岬測定所において対応基準値を超え第2モード運転となった原因は特定できなかった。

4.3 モニタリング測定値に係る対応基準値（全 β /全 α 放射能濃度比）の見直し

平成17年から平成19年の期間における全 β /全 α 放射能濃度比の平均値の1.5倍の値を新たな対応基準値とすることとなった。